

# ほっこりだより

第 69 号 2014 年 7 月 6 日 発行

## 東向日キリスト教会

京都府向日市森本町下森本 6-5

Tel: 075 (931) 5934

<http://www.h-mukou-ch.jp/>

人生は出会いで決まる

今の自分があるのは、〇〇との出会いがあったからです。そのような体験を持たれる方が少なくありません。人との出会い、本や作品、音楽などが人生の転機となるのです。

京都の同志社は一八七五年（同志社英学校として）始まりましたが、それに尽力したのは新島襄と京都府の顧問をしていた山本覚馬です。覚馬は京都で開かれた世界博覧会に訪れた宣教師マーティンから「天道遡源」（キリスト教の証拠）を贈られました。これを讀んだ覚馬は感動すると同時にキリスト教に関心を寄せます。彼はやがて洗礼を受けクリスチャンになります。

後に覚馬は語ります。「これまでの長い疑問に答えてくれた。法律では限界があり、解決できない問題に明るい光がさしてきた。長い間探し求めて来たものがここに有る。」と言っています。今回、五名の者の出会いを紹介致します。夫々が聖書や教会と出会って人生の大きな転機となったのです。どうぞ、皆さまも良い出会いを迎えて下さい。 牧師記

### 出会い

H・S子

私は一昨年六〇歳で定年をむかえました。引き続き仕事を続けるより、教会との関わりを深める第二の人生を歩むことを優先しました。只今いつもワクワクした毎日を送っています。それはキリスト教についてもっと深く、広く知りたいという思いから神学校で学

んでいることが一つの理由です。またより大きな理由は聖書に触れることで日々心が新鮮にさせられることと、また教会の方々とのかかわりによって心が豊かにさせられることです。私の場合、三〇代前半まで会社の寮や社宅に入っていたこともあり、教会のトラクトやチラシを手に入れたことが無く、キリスト教は見ず知らずでした。しかし人生で挫折したことがきっかけでキリスト教に淡い期待を持ち、住まいに近い教会へ行きました。教会には一般の社会では決して味わえない暖かさ、温もりがあります。そして若い人も、高齢の方も一緒に語り合ったり、助け合ったりする場が、教会にはあります。教会には定年はありません。いつまでも生涯現役の思いが与えられる場所です。普段の生活に何か問題を感じている方にとっても、なんらかのヒントが得られる、教会はそのような場でもあります。経験を通し、実感しています。

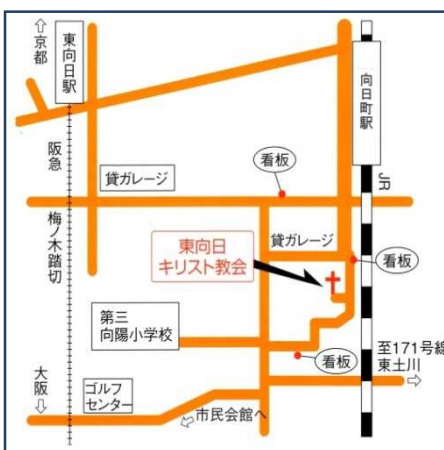
### 一つであることの喜び

E・E

私は生まれたときからキリスト教の家庭で育ちました。親は厳格なクリスチャンで聖書の教えに忠実に生きることが心かけるよう常に子どもたちに教えていました。私は五人兄弟の長男として育ちました。兄弟の模範とならないといけないうちに、思春期になると親に反抗してばかりいました。また世の中の流れに従って幼い頃には悪い遊びにも足を踏み入れるようになりまし

しかし、何をしても喜びが感じられず、心が空っぽに感じてしまうような思いに悩まされた時、私を助けたのは、幼いときに読み聞かされた聖書に書いてあるキリストの教えでした。人の人生や家族、共同社会には必ずといっていいほど規律というものが必ずあります。それは人を縛る窮屈なもののように思えますが、同時に人を守るものでもあります。キリストの教えを一言で言い表すならば、それは自分を、そして家族の秩序を守るもの、と言えるのではないのでしょうか。どんなに立派な人生を歩んでも、立派なことを言っても、家族が不幸であるというのは私にとって悲しみです。家族が仲良くやっけていく、家族が一つとなっていく。ここに本当の喜びがあるのではないかなと今の私は思えるようになり、そこにささやかな感謝と平安があります。

### 教会案内図です



## 慰めて下さるお方

M・T子

「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるとです。」聖書にこのように書かれています。ろがあります。

私たちは、常に喜んでいることができません。そして、時には悲しみや不安、孤独を感じ息詰まることもあります。人には知られたくないこと、また、人と話すことが苦手で、自分の気持ちを話せない、うまく伝えられない。こんな事を言ったら、周りの人はどう思うだろうと感じてしまうこともあるでしょう。しかし、あなたのこと全てを知っておられ、知っておられるだけではなく、愛して、慰めてくださるお方がいるのです。私はそのお方に出会い、今は希望を持つことができる人生を送ることができています。その喜びを少しでも多くの方に知ってもらえたらと願っています。

## 私の証

H・A子

私は、現在六一歳です。七年前の五四歳の七月一日に突然神様に出会いました。この日は、知多のぞみキリスト教会で夕方からゴスペルカフェというイベントがあり、友人から誘われて、軽い気持ちで参加しました。若い方々が賛美を歌う場でした。賛美は知りませんが、歌うことは好きでしたので、楽しい時間を過ごしました。帰りに本などを頂いてそれらを家ですぐに読み始めました。

「パワーフォーリビング」という本のある箇所を読んだ途端、突然涙が溢れて溢れて溢れて溢れて、声をあげて嗚咽し始めました。何が起ったのか分かりませんでした。その箇所には「問題は私たちの自尊心です。人生における問題を自分一人で処理できないということに認めたくはないのです。」と書いてありました。朝すぐに、のぞみ教会に電話をし、「神様のことを教えてください」とお願いしました。私は、全てに高慢であり、人を身下し、人生は私が決めるのだと豪語していましたが、実際は、何もかもうまくいかずに行き詰っていました。離婚もし、借金もありました。そんなボロボロの私を神様は、ものすごい勢いで、駆け下りて来て大きな愛と恵みで抱きしめてくださいました。二〇〇七年の一月二日に私は洗礼を受けました。東海聖書神学塾の塾生として今いることは、あの日が必要になかったことです。神様から頂いた豊かな人生にただただ感謝します。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

使徒の働き一六章三一節

## 東海聖書神学塾

H・I

私が最近読み直した本の中で心に留まった箇所が、『続 氷点』の次の箇所です。

『自分一人ぐらいと思っはいけない。その一人ぐらいと思っはいる自分に、たくさんの方が関わっている。ある一人がでたらめに生きると、その人間の一生に出会うすべての人が不快になったり、迷惑を被ったりするのだ。そして不幸にもなるのだ。』そして、真の意味で自分を大事

を大事にすることを知らない、とも：(中略)：

『一生を終えて後に残るのは、我々の集めたものではなくて、我々が与えたものである。』ジェラルド・シャンドリという人の言ったこの言葉がなぜかしきりに頭に浮かぶ。おもしろいものだね。あくせくして集めた金や財産は、誰の心にも残らない。しかし隠れた施し、真実な忠告、暖かい励ましの言葉などは、いつまでも残るのだね。：(中略)： 私は、この言葉によって、何か一条の光が胸にさし込んだ気がします。どんな風に自分の歩みが変わるかわかりませんが、ようやく足を一歩踏出そうとしているのです。」

## 俳句・短歌

一生に一度の二〇歳新樹光

震災後余震のとても多ければ

ハイハイしたがる吾子を抱きたり

小さき掌をゆっくり開けば朝顔の

種三粒を吾にくれたり 古都葉

今後のイベントを  
紹介します。

## 九月のイベント

十一日(木) 敬老の集い「高齢者を囲んで会食。実費負担です。

十四日(日) 敬老の日礼拝。祝福式。